

幼児期以後の発達

細 部 国 明

第7節 第一反抗期

1. 第一反抗期とその背景

反抗期は愛着形成後の問題である。この場合の反抗とはどういうことかという、それは言うことをきかない状態である。その状態は背景によって大きく3つに分類できる。1つは発達途上に表われてくるものである。その時期は絶対に動かないというものではないが、3歳前後に表われるのが第一反抗期(1st negativistic age)で、12歳前後に表われるのが第二反抗期(2nd negativistic age)である。これらは自我の発達に伴う自己表現と関係がある。2つ目は育児態度や環境条件等によって表われるものである。「うちの子は3歳頃から小学生になった今も反抗が続いている」などという場合は大抵この型である。3つ目は体質的・医学的なことによる場合である。例えば、テンカン、多動性などが関係している場合で、母親がじっとしてなさい、といっても、静かにじっとしていることはないので、母親から見れば反抗とみなされる場合などである。本来、反抗期といわれるものは1番目のものを指す。

生まれたばかりでまだ歩けない時から育児をしてきた母親の立場から見れば、今までは自分を慕ってくれて素直な所が多かった。ところが歩行できるようになり身体的活動の範囲も広がり、言語表現も可能になってくると、母親の

方も今までのように何でも手伝ってやり依存させてばかりいるわけにはいかない。代表的な例としては毎日の排泄訓練 (toilet training) など1人で出来るように躰けようとする。母親側の要求も自然に変化してくる。子どもの方も今までよりは知的に発達してきたとはいえ、何しろ初めてのことが多く思うようには行かない。自分が発達してきた分だけ自己主張も出てくる。その子の内面に今まではなかった強い主張や否定は、世話をしてきた母親の立場から見れば反抗と映りやすいのであろう。

この自我の発達と母親を通しての社会化 (socialization) への要請が交差する時点で起きる現象が反抗期と命名されたのが、乳児の世話をしてきた立場のビューラー夫人¹⁾によるのは、尤もなところがある。その名称は独立期・変動期・改革期・混乱期どれでもよかったのかも知れない。子どもにとってはこの世で初めて本格的な対人交渉が母親を通して始まる時期である。この時期の母子関係の転換は母親にとっても通過しなければならない母子関係における最初の関門である。

2. 反抗期と意志の発達

表7・1は、教育相談を受けた子どもについて、第一反抗期と意志との関係を調べた結果である。また第一反抗期を経験しない子どもは児童期に入ってから教師に依存することが多いと言われる²⁾。反抗期現象には様々な発達の要因が

表 7・1 (第一) 反抗期と意志の発達 (ヘッツァー)³⁾

	反抗期のあったもの	反抗期のなかったもの	合 計 (%)
意志正常児	84	16	100
意志薄弱児	21	79	100

1) Bühler, Ch., The social behavior of the child, in a Handbook of child Psychology by C. Murchison 1931

2) 依田新 (監修)「新教育心理学事典」金子書房, 1977, p.364

3) Hetzer, H., Die Entwicklung des Kindes in der Anstalt (in Busemann, A., Handbuch der pädagogischen Milieukunde, 1932), (山下俊郎「幼児心理学」S. 49, 朝倉書店より)

絡んでいることがわかるであろう。この反抗は親の愛情を確信しているときにのみ生じるとも言われる。もしそうだとすると意義深いことである。目の前に親が居なくても親の愛情を信頼できる愛着形成がなされていないと、この種の反抗はできないのである。しかし、子どもの反抗を特に意識しなかった母親が居たとしても、そのことは必ずしも反抗期がなかったことを意味するわけではない。

第8節 幼児期の遊び

歴史家ホイジンガ(Huizinga, 1938)が人間を「ホモ・ルーデンス(遊ぶ人)」と定義したぐらい遊びは人間にとって本来の活動に近いところにある。子どもにおいては特にそうである。子どもは遊びの天才である、とは一茶の言葉だったか。鳥や哺乳類などにも遊びはある。人生の各時期によって遊びの意味は異なるが、諸々の発達曲線が急上昇を続けている子どもと、ほとんど現状維持ができればいい大人の場合とでは遊びの重要性は大きく異なる。もし2～3歳児が1年間遊べなかったとしたら、恐らくその影響は一生ついて回るであろう。

1. 遊ぶことの大切さ

子どもの心身の発達において遊びの持つ価値について述べる¹⁾。

(1) 身体的価値

図11・4のスキヤモンの発達曲線の神経型に示されるように脳重量の発達は生後3年間で約60%強まで急上昇する。その急速な発達に比べ得るものが日常の遊びの中に含まれている。どこにでもあるぶらんこ遊びでも表8・1のように多くの運動機能が鍛えられる。成人とは異なり現在以上に運動・身体的機能を発達させなければならない幼児にとっては、自発的に諸々の身体的機能を使える遊びは欠かせない。また身体的活動が心的発達に与える影響は成人より子

1) Hurlock, E. B. (1964), *Child Development*, 4th ed. New York: McGraw-Hill. 小林芳郎・相田貞夫・加賀秀夫(訳) 1971, 児童の発達心理学, 誠信書房

表 8・1 子どもの遊びと運動機能 (高野, 1972)¹⁾

ぶらんこ遊び	身体の支配力, 平衡感覚, 持久力, 柔軟性, 手足の協応性, リズム感など
すべり台遊び	高低感覚, 速度感覚, 平衡感覚, 敏捷性, 協応性など
砂 遊 び	巧緻性, 器用さなど
大型積木遊び	平衡感覚, 協応性など
ボール遊び	協応性, リズム感, 敏捷性, 正確さ, 器用さなど
低鉄棒遊び	平衡感覚, 柔軟性, 巧緻性など

どもの方が大きいことは勿論である。

(2) 教育的価値

① 学業的価値

④ 知識体系と内的動機づけ：一般に遊びは学業に対立するものとして受け取られている。ところが“子どもは遊ばないと馬鹿になる”－テニスソー。子どもは遊びを通して自然界に接し、物の形状や状況におけるその変化など、事物の様々な属性を知る。小学校に入学するまでに子どもが遊びを通して得る知識体系は相当なものである。もし、それらを遊びの代りに大人が教えるとしたら科学の発達した現代でも不可能であろう。幼児にとって遊びはそれ自体が魅力的であり、大人が「さあ遊びなさい」等と言わなくても自発的に学習への動機づけがなされる点で、遊びは並はずれて優れている。幼児の遊びは、いわば合科科目以上のものである。

⑤ 集中力：勉強に限らず物ごとに打ち込める力が重要であることは言うまでもない。遊びによって注意は散漫になるのではない。それどころか、子どもから自発的に選択した興味ある遊びはむしろ子どもの注意集中力を養うのである。

表 8・2 はビックリ箱から何が出るかじっと見ていられた時間である。表 8・3 は子どもが一番長く遊んだ時間の平均である。これらの表に示唆されている

1) 内山喜久雄・高野清純(編) 講座心理療法, 第5巻, 高野清純(1972), 遊戯療法の理論と技術, 日本文化科学社

表 8・2 注意の集中 (マイルス)¹⁾

3～4 歳	8.0 秒
5 歳	16.3
6 歳	27.5

表 8・3 遊びの最長継続時間 (バイル)¹⁾

1 歳	21.1 分
2 歳	27.0
3 歳	50.3
4 歳	83.3
5 歳	96.6

ように幼児の集中力は極めて貧弱であるが、遊びのように興味を引くものに対しては、驚く程の注意力を示すことが出来るのである。注意力には長さや強さがあるが、ビューラー夫人¹⁾の調査では4歳頃に注意集中力が急激に進歩している。夢中になって心を打込める遊びは、子どもに集中力をつけるのである。逆に、夢中になって心を打込める遊びを子どもから取上げていくと、発達上のいろいろな問題が発生してくることが多い。

② 社会性の発達

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。……(夏目漱石, 草枕)。この世は複雑である。子どもが社会的学習をどのようにして発展させていくかは大きな問題なのである。野生児は早死にしている²⁾。この世に関する社会性発達に不利を蒙っているからでもある。

パーテン³⁾は2～4歳半の保育学校の幼児の自由遊びを観察して、社会的参加の様式から遊びを6類型に分類した(図8・1)。①何もしていない行動：ぶらぶらしてその時々に関心をひくものをながめる等。②一人遊び：傍に幼児がいても全く無関係に遊ぶ。③傍観者の行動：他の幼児が遊ぶのを傍観しているだけで自分は参加しない。④平行遊び(parallel activity)：他の幼児と同

1) Bühler, Ch. (1928), Miles, K. A. (1933), Beyrl, F. (1928) のデータは山下俊郎, 昭和49年, 幼児心理学, 朝倉書店, pp. 159～163 による。

2) 18C末フランスのアヴェロン地方で発見され、後に医師イタール(Itard, J. M.)によって育てられたヴィクトールは14歳、1828年ドイツのニュールンベルクで見出された、穴蔵に十数年間入れられていた Kasper は20歳、1920年インドのミドナプールの森で発見された狼児姉のカマラは17歳、妹格のアマラは2歳で死亡した。

3) Parten, M. B. (1932), Social participation among pre-school children, *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 27, pp. 243-269.

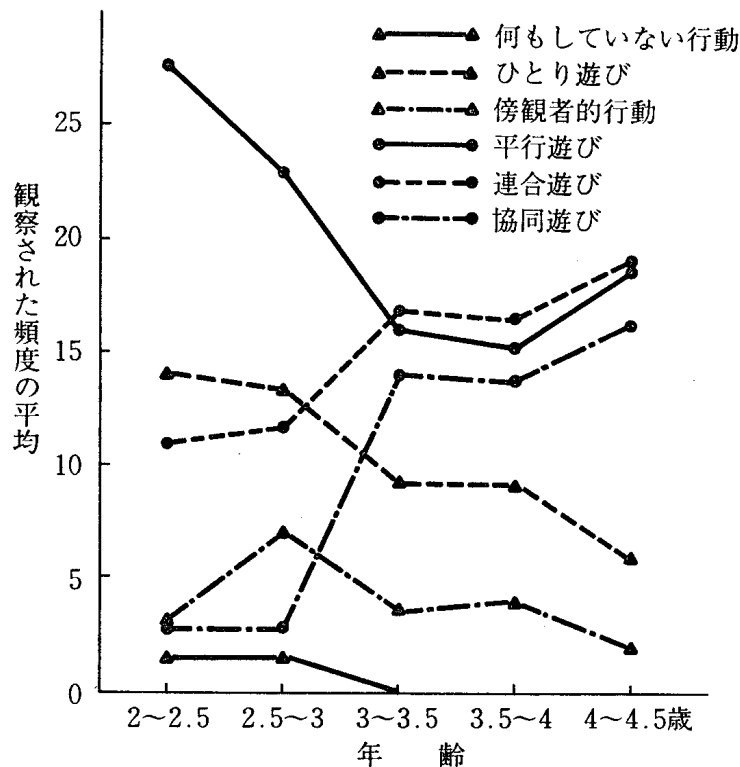


図 8・1 社会参加の様式からみた遊びの類型
(パーテン, M. B., 1932)

じ場所で同じ遊びをするが相互交渉はない。⑤連合遊び：相互交渉はあるが遊びが組織化されていない。⑥協同遊び：ルールや役割分担が存在するゲームやごっこ遊びなどが出来る組織的な遊びで、相手の立場や社会の縮図の理解にも通じる。

次に遊び集団の大きさ・ケンカの年齢的变化を図 8・2 に示す。2 歳では 1 人遊びが多い。特に 3 人遊びは 2 人遊びと異なり社会性発達や自己統制等を必要とする力動性に富む集団である。ケンカは 2～3 歳児では身体的行動が多く 4～5 歳児になると言語的行動の方が多くなる。ケンカを通して所有権争い・意見対立などの社会的問題の解決の仕方、自己の主張や制御、手加減のルール、相手への思いやり、友好的関係等が身につくところが多く、大人のケンカと異なり幼児同志のケンカは発達上重要な要因を含んでいる。

(3) 治療的価値

心理療法でカウンセリングは言語を媒介にするが、遊戯療法 (play therapy) は遊び (play) を媒介にして問題を解決する。遊び方により人形療法 (doll play), Finger painting, 集団遊戯療法などと分類できるが、いずれもが遊び

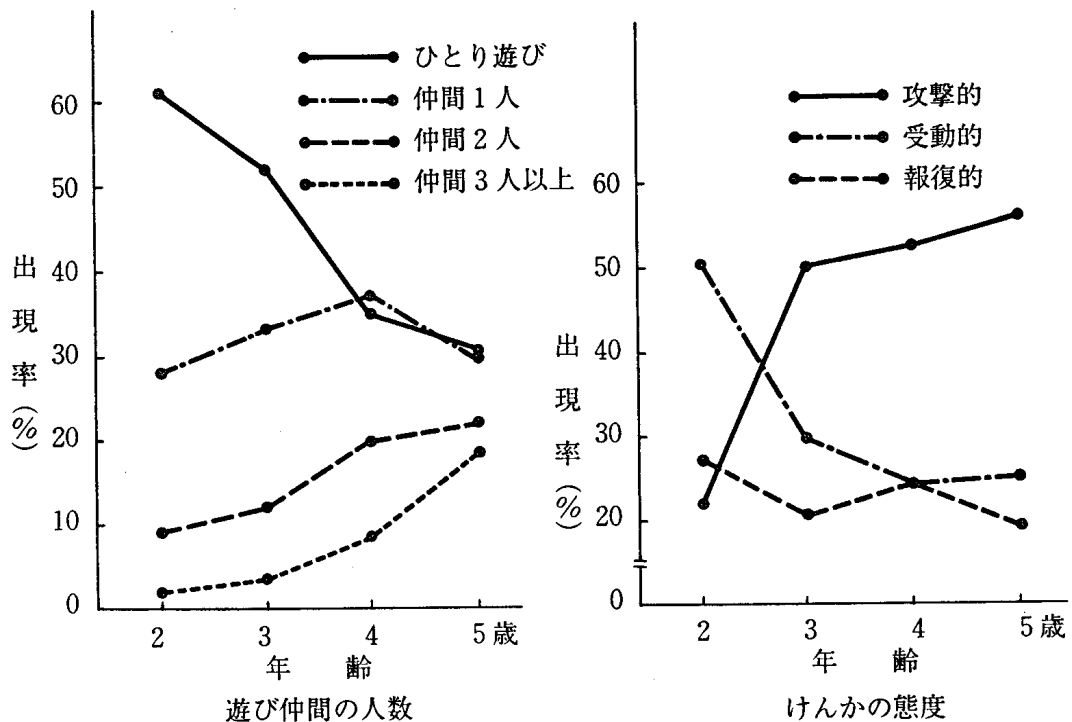


図 8・2 子どもの遊び¹⁾

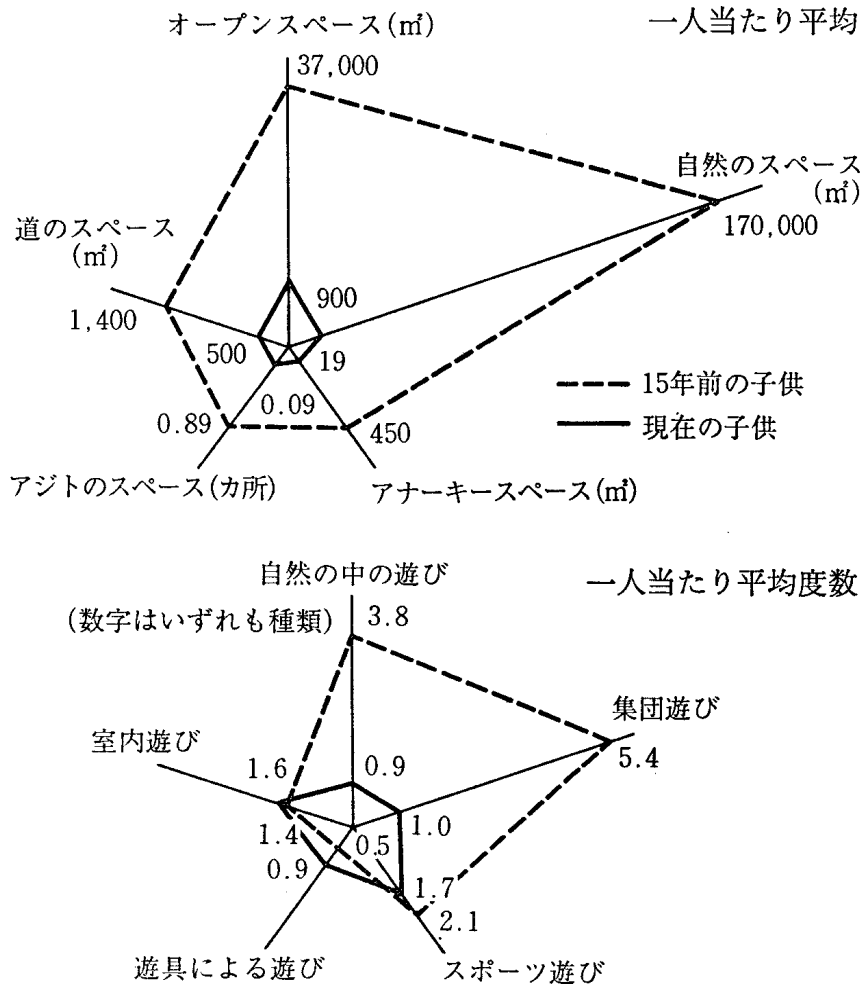
を通して、情緒的緊張を解消したり、抑圧されたものが十分な表現手段を与えられたり、未解決な葛藤場面を追体験したり、新しい解決法のリハーサルをしたりすることによって問題解決力や適応力を獲得していく。例えば、ある子どもは母親の勧めにも拘らず、食事でおかずを食べれなかった。後でその子は人形にしきりにおかずを食べさせるような遊びをしていた……。このような遊びは葛藤の克服につながっていく。逆に子どもから自由な遊びを奪うことは問題発生につながりやすい。心身に問題を持った子どもは、年齢相応の遊びができなくなる。子どもの場合、発達上問題があるかどうかを日常判断する有効な診断法の1つは同年齢遊びができるかどうかである。

2. 現代における遊びに関する諸問題

最近子どもから遊び場を奪っている状況が発生している。図 8・3 は興味深い調査である。遊びの空間や集団遊びが激減している。また守屋光雄²⁾ の調査

1) Green, E. T. (1932), Group play and quarreling among pre-school children, *Child Development*, 4, pp.302~307.

2) 守屋光雄「遊びの保育」新読書社, 1975.

図 8・3 遊び場の空間と遊びの内容¹⁾

は1人遊び・家の中での遊び・非活動的な遊びが多いことを現代っ子の遊びの特徴として指摘している。これらはいじめ（っこ遊び）等の増加，問題顕現の低年齢化と潜伏化の現象と軌を一にしているところがある。

第9節 徒党時代 (Gang Age)

おもに児童中期から後期にかけて，徒党 (Gang) を組んだ特異な仲間集団が発生することがある。ギャングの研究をしたシカゴ学派の1人ファーフェイ²⁾ にならって，この年頃をギャング・エイジと呼ぶ。現代の都市化や遊び場の減

1) 毎日新聞昭和50年5月5日版より

2) Furfey, P. H. (1926), The Gang Age. A Study of Preadolescent Boy and His Recreational Needs.

少の中で形成されたギャング集団の事例を示す。

〔4年男子の事例〕 団員のシンボルは近所の酒屋でもらったビールの栓で、それを忘れるとその日の活動に参加できない。その他、トランシーバーに見立てたホチキス、駄菓子屋で買った銀玉鉄砲、変装用の付けひげ等を持ってました。僕らの集団名は、メンバーが丁度5人いたので「ゴレンジャー」でした。名称は当時のテレビを反映していた。役割もリーダー、サブリーダー、救護などと決まっている。リーダーから指令が出ると、みなは例の所へ集まる。そこはビルの裏手にある粗大ゴミ置場で、タンスや洗濯機などを用いて5人で力を合わせて作った「秘密の基地」なのです。僕らの恐怖の日は木曜日でした。やはりこの日も基地がなくなりました。探偵団としての本領を発揮し、犯人追跡を始めました。手分けして金曜、土曜と走り回りました。とうとう犯人がわかりましたが「清掃車が相手じゃダメだね」と笑い合った。そのうち毎火曜日に他のところに簡単に組み立てた基地に移ってからは、基地を壊す犯人はいなくなりました。

〔女生徒4年の事例〕 リーダー的存在はなく、4人はみな平等であった。4人の間では他の子にはわからない、パンダ、かっぱ、クジャク、うさぎという動物のあだ名をつけて呼び合っていた。放課後わずかな時間でしたが、人目を忍んで行ってはいけない屋上に行った。机や椅子を積み上げた、不安定な、かつ危険な基地でしたが、そこは私達だけの世界です。いつかは誰が発案したのか「笑う会」を持ちました。「ハイ、笑おう！」と言われたら、どんな時でも、笑うネタがなくとも3分以上笑い続けるのです。それから毎土曜日は、お互いの合図で5分くらい笑ってから交換日記をまわしたりしました。その後、いつの間にか笑うことは無くなっていました。

これらの事例のように集団名・会員証・暗合・バッヂなどが工夫される。このようなことはギャングの連体感や我々意識を高める。たまに異性が混ってたりするが、メンバーの同胞、幼馴染みなどで、ほとんど異性ということ意識しない点でも、普通の集団とは異なっている。仲間集団の年齢と大きさを表わした1つの調査が図9・1である。

ギャングの活動範囲は広く、集団非行的なイメージを与える反社会的なものから、冒険的活動、探検、採集、スポーツ活動など社会適応的なものにまで及ぶ。徒党は一般に次のような特徴を持っている。親や教師など大人から干渉されず自分たちだけで支配し自由に活動できる団結性が強く閉鎖的な同性の仲間集団である。自分達だけの秘密を持ち、個人的勝負よりも相手の集団とチーム同志で争う遊びが好まれ、高度の集団機能を発揮する。

児童ギャングのプラス面としては集団目標の設定・解決法・達成、役割の分担と遂行、指導と追従行動、順法精神、責任感、集団の賞讃や非難に対する感受性や反応の仕方など社会性の多くの側面の学習を含んでいる。また、仲間への同一視による人間的特性の取り入れ (introjection)、一体感、我々感情 (we-feeling) の発達などプラス面は非常に多い。マイナス面としては児童の事故の危険性、社会的被害—非難などがあるが、児童ギャングは幼児同志ではまだできないような社会性の発達を含んでいることがわかるであろう。

児童ギャングの社会不適応的行動は一過性で思春期の到来やふとした出来事でいとも簡単に終結してしまうのが普通である。しかし、健全に経過しないで高年齢へとずれ込むと他の発達、例えば性的発達なども加わって来て集団の性質も複雑になってくる。近頃、社会的問題として騒がれた“いじめ”はギャン

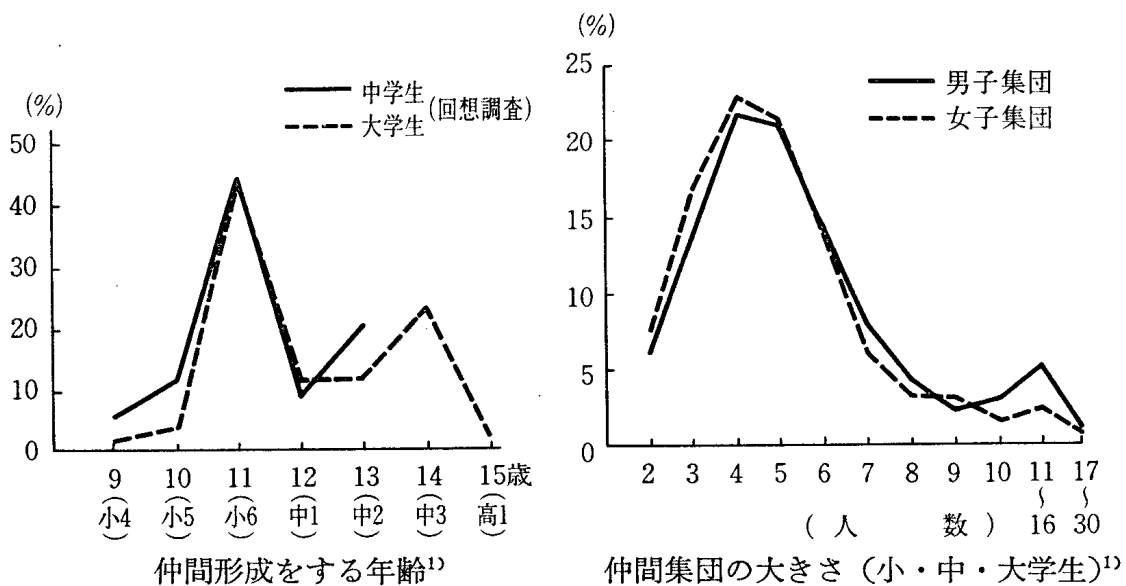


図 9・1 「われわれ」 集団

1) 小林さえ (1968), ギャング・エイジ, 誠信書房

グ集団活動の1つの変形である。少女の万引集団などにもギャング的特性が濃いものもある。塾ばやりの今日では、ささやかながら塾からの帰宅途中がギャング的特性を発達させる機会になっていることもある。学校内での理科などのグループ活動が延長されたところで秘密結社的な活動が行なわれることもある。児童が健全なギャング活動が行なえる自然・文化・人間環境が整うのに越したことはない。

第10節 少数親密関係時代

児童期からプレ青年期¹⁾ ころに盛んになるギャング・エイジすなわち「われわれ」集団の次に来る対人関係上の課題はどんなものであろうか。それは少数者の、より親密な対人関係である。一般的には中学時代の課題である。ギャング・エイジと同じく同性同志である。普通は平凡な日常生活の中に生じていることがほとんどである。

〔事例〕 より親密になった相手はギャング・エイジの友達の中の2人の同級生だった。学校が終ると家に帰る前に友人の部屋に3人集った。ゲームをしたり、本を読んだり、テレビを見たり、今思っても特別のことをしたわけではないが、友情というものを理解できるようになった。彼らにはいつでも会えるという安心感が形成できた。ギャング・エイジの頃は裏切りもさほど気にしなかったが、この時代ではそれは大変なことだった！ このような関係は約1年半続いた。

上の事例は特に劇的なものではなく、普段見られるようなケースである。家庭環境にもよるが友人の家に泊ったりすることもある。女子だと相手の弁当を作ったり、数人でショッピングに行ったりすることもある。よくあるのは交換

1) フロイトの生物学的色彩の濃い精神分析理論に社会心理学・文化人類学的視点を加えたのが新フロイト派と呼ばれる。新フロイト派の指導者として Fromm, E. (1900~80), Sullivan, H. S. (1892~1949), Horney, K. (1885~1952) らがいるが Sullivan 学派は Freud, F. の潜伏期の一部を pre-adolescence と名づけ、この時期に現われる同性間の友情を人格発達上非常に重要視した。

日記である。交換日記の内容は、秘密話、うわさ、単なる日常的なこと、書くことがなくなると絵ばかりになったりまちまちである。時世がら特に女の子だと外出しにくいこともあり、現代機器を活用して長電話もよくある。さっきまで会ってきて特別用もないのに、親によっては理解に苦しむことがある。

この時期にすることは社会的価値はないことが多いが、本人たちは真険にやっている。これほど真険になれることは発達上の個人的価値を有していることが多い。今まで对人的に望まれなかった子がこの時代の親密関係を経験することにより、人間への信頼を劇的に回復することもある。Sullivan はこの時期は単なる青年期の一時期を超えて真の愛へ向けて心的力動が現われる、人格発達に決定的な意味を持つ時期であると重視した¹⁾。性格形成上大きな“発達とりもどし”学習が可能な時期の1つである。思春期でもあり親との間に葛藤を生じやすい時期であるが、友人のために友人の親子間の葛藤調整に、それこそ生命がけで心血を注ぐこともある。平たく言えば自分が損をしてもよいと思う人間、また自分よりも大事だと思える人間との信頼関係の形成は今までの不幸な人生を修正し得るものを有している。ギャング・エイジとは明らかに異なった人間関係を形成できる能力が備わる時期である。

この少数親密関係時代という呼び方は、まだ一般化されるまでには至っていないが、性格形成上重要な役割を果たし得る時期でもあるので、その意味を少し整理しておこう²⁾。

① 愛の萌芽：自分を多少犠牲にしてまでも友人の幸福・名誉のために自分は何をなすべきか、という形の他人への関心のあり方である。自己中心的な友人形成から他者への配慮をもった人間関係の形成は、まさに愛の萌芽とも言える。

② 異性愛への移行過程としての意味：この人間関係は家族以外の人間との間に生じる。相手は同性であるとは言え、自分以外の人間である。同性よりも

1) 中井久夫・山中康裕(編), 1978, 思春期の精神病理と治療, 岩崎学術出版社

2) 笠原嘉(1984) アパシー・シンドローム, 岩波書店(第10節の構成についてはこの書に負うところが大きい)

っと複雑でわかりにくいことが多い異性への接近の前に、他者への配慮を持った尊厳な個と個の人間関係を経ることには意味がある。

③ 個の独自性と社会性の獲得：11節で述べるように生理・身体的変化が著しい新しい自分の身体を引き受ける人間は自分以外にはいない。それは青年の自立と個性化への第一歩である。この時期には身体的悩みを持つことも多い。その悩みは対－社会的関係・他者の眼にふれやすい身体表面であることが多い。青年期前半に限らないが女子に生じやすい思春期やせ症とか神経性食欲欠乏症は、生物次元の第二性徴による身体的成熟とは矛盾する方向にあるので、心理・社会的次元では成熟拒否または依存から自立への逡巡が存在することもある。これは自分の身体を受容することへの葛藤である。男子については鼻・眼・髪等々人の眼にふれうる身体表面について異形恐怖などの悩みが四対一で女性より多いといわれる。しかし、それらの悩みは、単なる身体的次元や心理社会的次元にとどまらず、自分自身の存在をも根底から疑がう実存次元の問題でもある（図10・1）。その悩みは世界で自分だけではないかと思う程の不安¹⁾を抱くこともある。

そのようなとき、悩む心のひだを微妙な言語表現で他者に伝達しようとする抽象的思考も発達してくる(参照、第13節3.の(4)形式的操作)。自分と同じこと

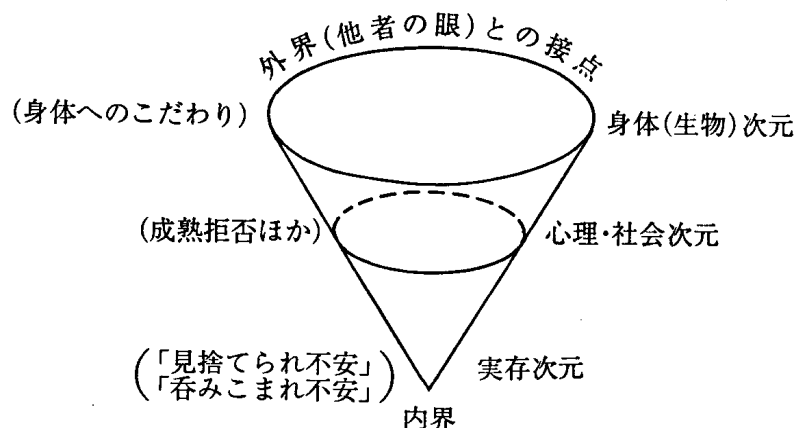


図 10・1 関係する次元²⁾

1) 精神分析による幼児期の「見捨てられ」不安と、逆の「呑みこまれ」不安、更にはユングのグレート・マザーによって表わされた人類に根源的な元型との対面をさえ予想させる。

2) 笠原 嘉，前掲書，p. 20 のピラミッド形に変更を加えた図である。

を体験し不安を未来に投げかけている少なくとももう1人の人間がそこにいることを見出せる意義は深い。大人や書物からの単なる知識や慰めではない。今まで自分に向けられていた何ものかが、コペルニクスの転回をとげ他者に向けられ、社会性へと開かれていく。

④ 心理的離乳の受皿：いろいろな面で“親から距離をとる”ことをはじめるこの時期に上記のような同性同志の友人関係を形成できたとしたら、親からの自立の課題もすすめやすくなる。

少数親密関係時代に入りにくいタイプについてふれておく。その来歴を一先ず3つに分けて整理しておこう。1つは幼児遊びの早い時期から人間関係を最少限にしてきた類である。友人と遊ぼうとせず学齢前から家の中で本ばかり見ていたとか、小さい時から動植物へ牧野富太郎¹⁾ 張りの水準をこえた関心などがみられることもある。その時代や社会の風潮とも絡んで将来学芸その他の分野で才能を開花させうる人も稀には居るが、それにしてもこの時期を失することのマイナスは無視しえない。2つめはギャング・エイジに或る種の弱みがあり集団から排除されないために三枚目的・ピエロ的役割をひきうけて外見上はどの集団にも入って友人が多くあるかに見える類である。親によってはうちの子は誰とでも遊べると自慢し、今日はこっちの人が駄目ならあそこに行ってみなさいと、そのような役割を促進させてしまうケースも稀にある。3つめはギャング・エイジにはむしろリーダー格であったのに、青年期になって心の友を得たいと望むころにうまくいかなくなる類である。

精神科医が出合うクライアントの中には何らかの理由でこの少数親密関係がうまくいっていなかった人が多いという²⁾。現代はいろいろな領域の境界において、ほんの少しの動きで反対側の領域に行ってしまう境界例 (borderline case)³⁾ 的現象が多い。精神医学界と教育界の境界もそれほど堅いものではない。医学領域で見られることが一般社会や教育界で見られることも多い。総じ

1) 独学で植物の分類に多大な貢献をした。彼の名誉のために一言添えるが、少数親密時代云々とは一切関係はない。

2) 笠原 嘉, 前掲書

3) 清水康雄 (編), 「imago」10月号, 1990, 他を参照せよ

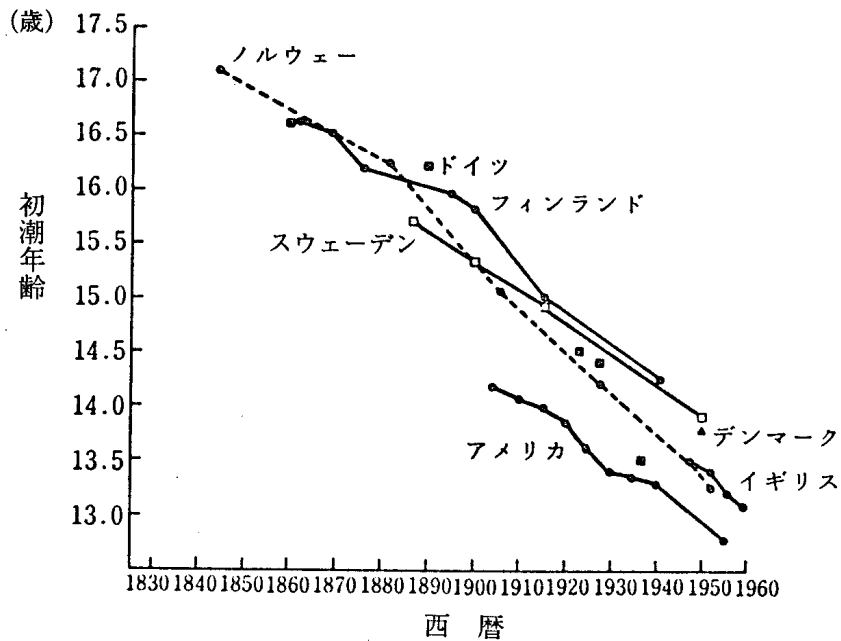
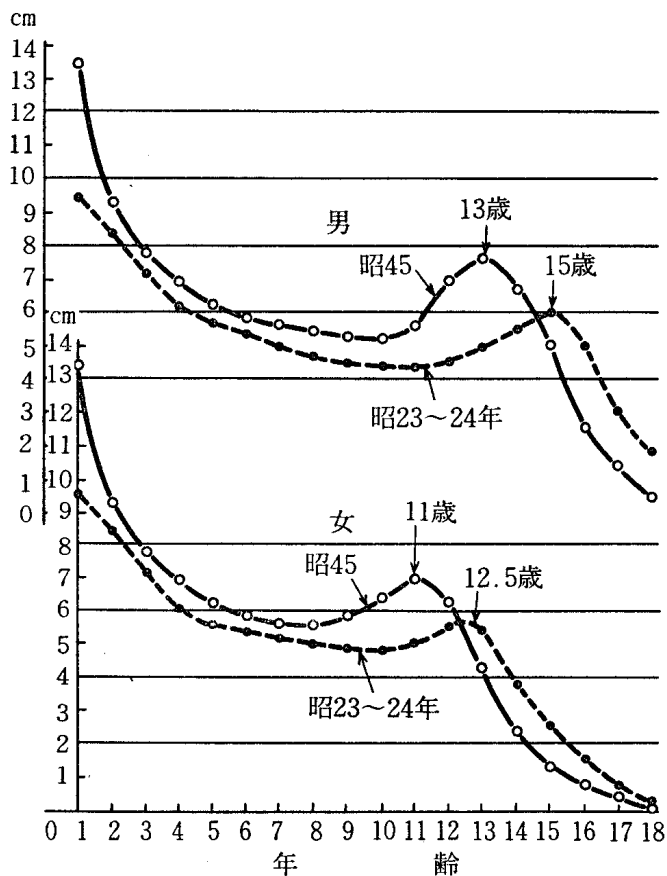
て上述のような来歴のクライアントが青年期に多く体験する代表的なものとして対人恐怖傾向がある。これは大人、子ども、赤の他人、親しい家人の中ではどうということはない。近所の人とか同年輩同志の数人～20人くらいまでのいろいろな意味でどっちつかずというか中間的な小集団が苦手である。ここに教育上の1つの対策が示唆されている。それは対象療法 (symptomatic treatment) 的ではあるが、ゼミナール形式の活用である。今1つの対策は、現代においては心の発達課題のずれ込み、言うなれば後傾化現象が多いと判断されるところから、高校時代以後数年間にかけてこの同性の少数親密関係をどれ程とり戻せるかである。繰り返すが本来、この親密関係は中学時代の発達課題と考えられるものである。

第11節 青年期の発達

これまで、日常生活に近いところで起こる対人関係の発達を中心に述べてきた。10節はすでに青年期に入り込んでいるが、青年期は複雑である。もう少し別の側面から青年期を見てみよう。

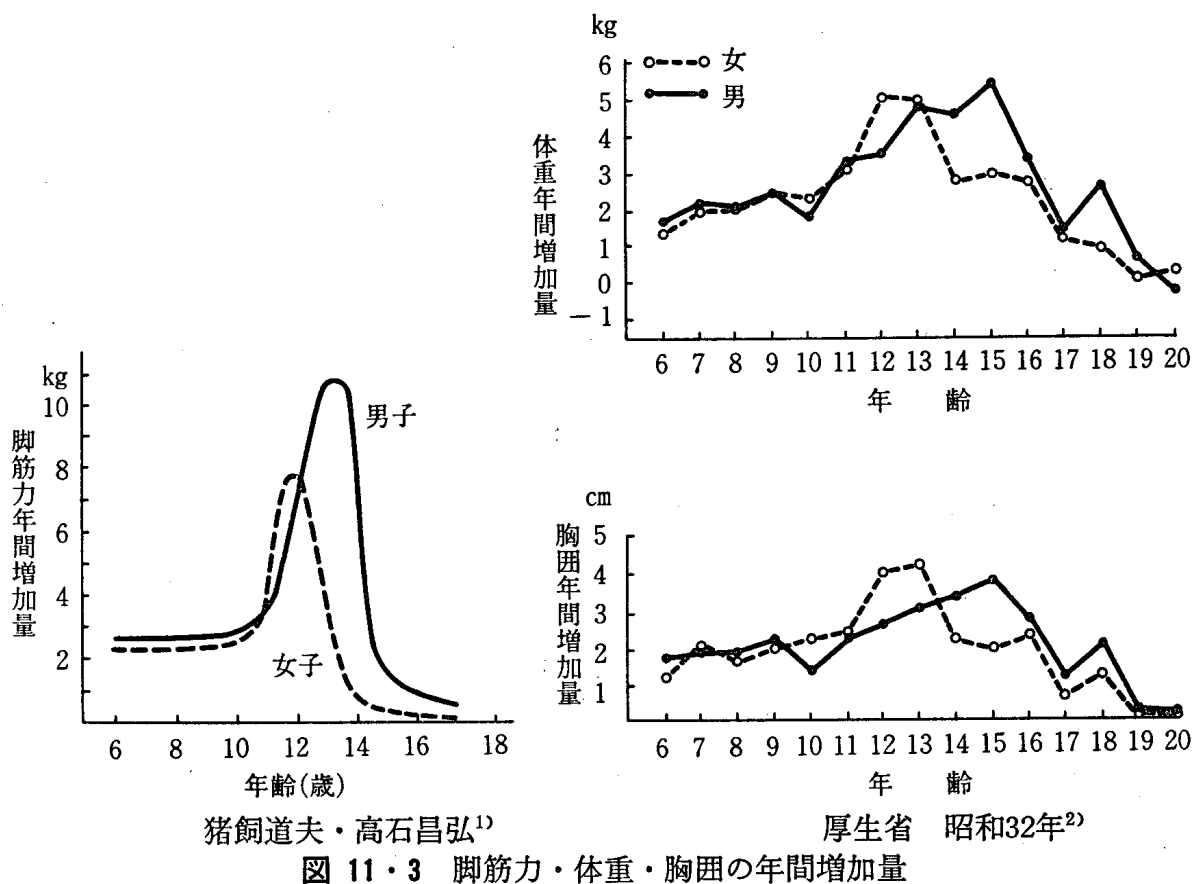
1. 生理・身体的背景

人間の身体発育が世代と共に促進されてくる現象を発達加速現象 (acceleration of growth) というが、これは特に青年期に顕著に認められ、3つの側面から考察できる。1つは成長前傾化 (成熟加速) 現象と呼ぶもので、女子の初潮 (図11・1) や男子性機能、諸歯芽発生などの時期が後の世代になるほど早くなることである。2つめは身長 (図11・2) 体重などの年間発達量、即ち年間成長速度が後の世代になるほど加速される、成長加速現象 (年間加速現象) の側面である。発達加速現象は先進国に共通に認められ、僻地よりも都市部、都市では周辺よりも中心部にその現象が早く現われる。今1つはこのような発達加速現象の民族差・地域差・階層差など空間的差異による発達勾配現象と呼ばれる側面である。これらの原因としては栄養状態・産業化や都市化による生

図 11・1 初潮年齢の年次推移 (Tanner, 1962)¹⁾図 11・2 身長の間年増加量²⁾

1) Tanner, J. M. (1962), Growth at adolescence. Oxford: Backwell.

2) 長嶺普吉「中高生の栄養と健康管理」, 永野重史, ほか『思春期全書』保健同人社, 1971.



活様式や刺激の変化・人種や季候の違いなどが考えられている。

図 11・4 のスカモン (Scammon, R. E.) の発達曲線は身体諸部分の発育経過を20歳の重量を100としておおまかに4つの発育型にまとめたものである。この図で2つのことを指摘しておかなければならない。1つは4つの曲線が一番アンバランスになるのは12歳前後、すなわち思春期である。今1つは身体発育、性生殖器発育抑制などに関係していたと考えられる胸腺が退化し始め、逆に第2次性徴³⁾ (secondary sex character) など性的成熟を促す性腺の活動が12歳前後から突然開始され、しかも急速に完成することである。

また、思春期の1つの特徴として図11・2～3の身長・脚筋力・体重・胸囲などに表われているように一時期の年間増加量の突出を指摘できる。

1) 猪飼道夫・高石昌弘 (1971), 身体発達と教育, 第一法規出版

2) 大平勝馬 (昭和37), 青年心理学, 日本文化科学社よりの引用

3) 第一次性徴, 第三次性徴, 性ホルモン (男性ホルモン: Androgens, 女性ホルモン: Estrogens) を参照。

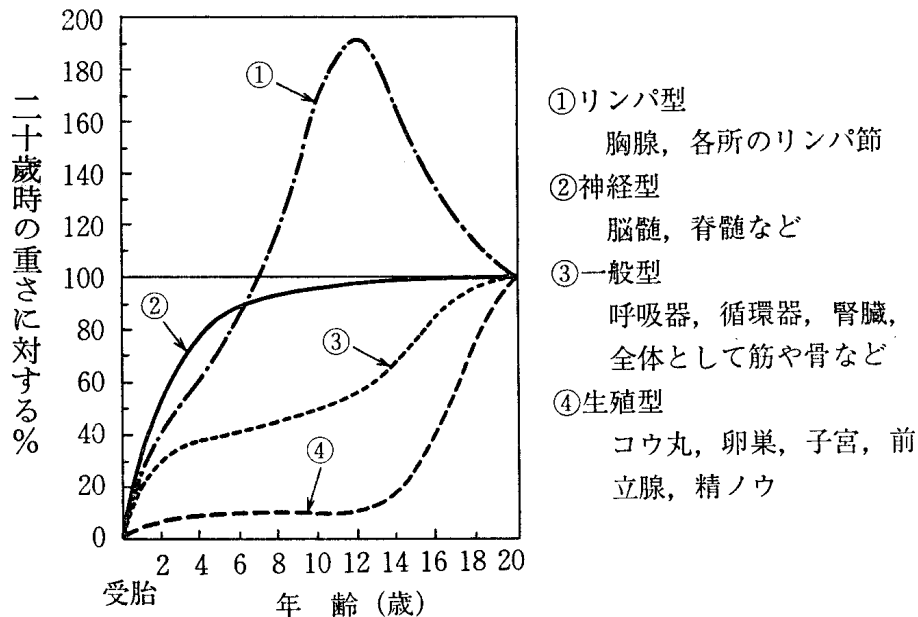


図 11・4 身体各部の成長の型：Scammon の発達曲線
(Harris *et al.*, 1930)¹⁾

上に概観してきたように青年期における急激な生理・身体的変化—成熟は心身の感受性や興奮性を高める。青年はこの新しい自分の身体を自分の心で引き受けていかなければならない極めて重要な課題を背負う。

2. 社会的背景

社会の第1線で活躍しているのは成人であり、子どもは将来そのような地位 (status) につくことが期待されている。しかし、青年は時によっては成人扱い、時によっては子ども扱いされる。青年のこのような中間的存在としての性格をレヴィン、K²⁾は周辺人 (marginal man または境界人)³⁾として特徴づけた (図11・5)。周辺人とは2つ以上の集団に同時に属しているが、いずれの集団にも完全に所属していない立場にある者をいう。同様にそのような立場にある集団は周辺集団 (marginal group) という。

1) Scammon, R. E. (1930), "The measurement of the body in children." in Harris, J. A., et al. *Measurement of man*, Univ. of Minnesota Press.

2) Lewin, K. (1890~1947) ユダヤ人の雑貨商の長男としてドイツに生まれた。彼の学問的立場は全体としては Gestalt psychology の立場にあるが Field theory の主唱者でもある。

3) 米の社会学者 Park, R. E. によってつくられた言葉。

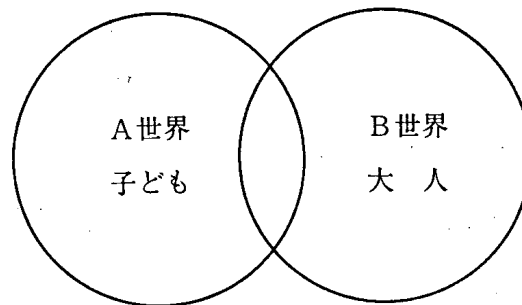


図 11・5 境界人

転校生・出稼ぎ労働者・身分等が急激に変化した者などは心理的に中間地帯にいる。在日外国人・何々二世などは法的に中間的扱いを受ける時がある。彼らの準拠集団 (reference group)¹⁾ は不明確にならざるを得ない。一言でいえば2つの世界に挟まれて葛藤を生じやすいということであるが、境界的な地位におかれている境界的人格 (marginal personality) は、その立場に相応した次のような特徴を伴ない易い。①社会的地位・集団所属感が不安定、②情緒不安定になりやすく過敏・不安・コンプレックス等を生みやすい、③自我意識にめざめ、自我意識過剰になり易い、④発展の可能性が大きい。

3. 心理・精神的背景

学校で困ったことがあれば「先生に言ってやろう」という入学当時の先生への接近的態度は青年期に入ると逆に鋭い批判を投げかけるほどにもなる (図 11・6)。また、親からも離脱の様相を示し始める。意識の上で余りにも親に依存し続ける青年には、本人も気付かない心の深層から心理的離乳を迫られる。次の夢はそのようなパパッ子が見た夢である。父に対する心理的距離が遠くなっている様子がうかがえるであろう。

〔夢〕 父が新しい自動車を運転して家から出て行く。まったく下手な運転で、その馬鹿さ加減に私は腹が立つ。車は危険な場所をあっちへ行ったりこっちへ行ったりしている。車はとうとう壁にぶつかって、ひどくこわれてしま

1) 我々の行動や判断の規範 (norm) として心理的に強く影響している集団をいう。それは個人が現実には所属している成員集団 (membership group) と対照的な意味で使われる。

う。私はしっかりしないと駄目だと父をどなりつける。しかし父は笑ってばかりいて、ぐでんぐでんに酔っていることがわかる¹⁾。

今まで身近かに感じていた親や教師から心が離れていくが、それに代る理解者も減少していく（図11・7）。また『大ぜいの中にも淋しいと感ずる事があるか』という問に対して「ある」という答が上昇していく（図11・8）。そのような心境は青年期の心性を表わす1つでもある孤独感(feeling of loneliness)の体験である。

親・教師・理解者に共鳴していたエネルギーは、彼らから離れてどこへ行くのであろうか？ 新たに共鳴できる何ものかを求める心的エネルギーは高まってくる。シュプランガー（1963）は青年の根本感情を「対象なき憧憬」と言い表わした。

やがて青年が共鳴できる対象が出てくるが生活条件によって、現存する人物・集団、過去の偉人、思想体系、宗教、芸術、文学、大自然への旅²⁾など様々である。それらの対象が在来の文化を否定したり、新奇なものであったりす

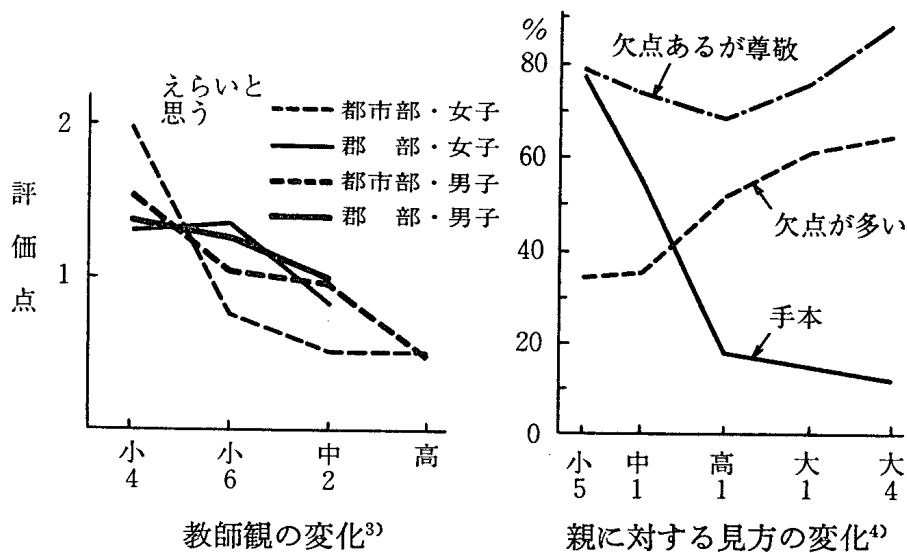


図 11・6 教師や親からの離脱の様相

- 1) Jung, C. G., The Practical Use of Dream-Analysis. C. W. 16, p. 152.
- 2) 19世紀末からドイツに起った Wondervogel 運動は青年達によって始められた。
- 3) 田中教育研究所 (1970), 特集「今の子どもは教師をどう見ているか」教育心理研究 13, 明治図書
- 4) 中山康子 (1972), 千葉大卒論「子どもの親に対する 見方の変化の 発達の研究」井上健治, 他編「青年心理学」有斐閣,

Q「理解者がいるか」 A「いる」

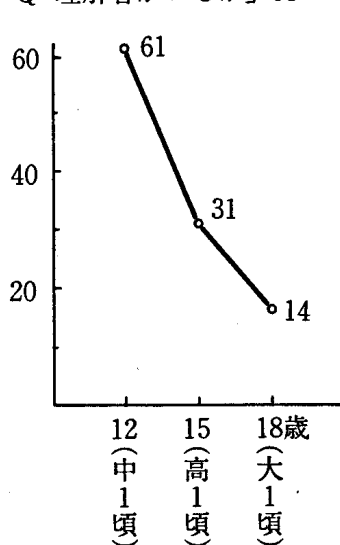


図 11・7 理解者の存在¹⁾

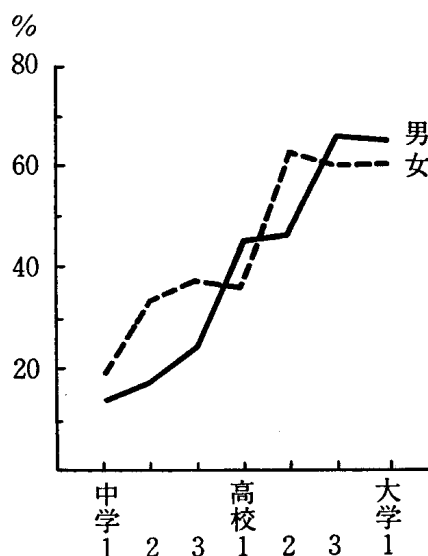


図 11・8 孤独感を経験したものの比率 (学年は現在の学制にあわせてある)²⁾

れば大人は理解に苦しむのが普通である。青年の孤独感は古いものを再発見していく歴史的役割を果たしたり、新しいものを創造するエネルギーに転化することがある。

孤独への指向は思春期ころから顕著になるが、孤独感にもマイナスの側面とプラスの側面がある。青年には孤独感から逃がれようとすると同時にそれに接近しようとする兆候が見られる。クラス・特定の準拠集団・友人などに受け入れられているということで安心感のある子どもは、逃避ではなく積極的に集団から離れて一人で音楽をきいたり物思いや思索に耽ったりする。内面の世界に向って孤独感へ接近できる楽しさも、友人関係と併走して、パーソナリティーの健全な発達のためには育ててやらなければならない。そのためにも幼児同士の遊びや児童ギャング体験などを経て集団への固着から離脱可能なレディネスが必要なのである。

児童期は外界，青年期は内界の獲得の時期でもある。新たに発見された内的世界を探索する時期でもある。シュプランガー，Eは青年期を“自我の発見”の時期であるとし，ホール，Sは“新しい誕生”といい，ルソー J. J. は“第

1) 落合良行 (1978)，日本教育心理学会発表論文集より

2) 依田 新，青年の心理，培風館，昭和24

二の誕生”と呼んだ。

4. 青年期の発見について

児童期が人生の一時期とみなされるようになったのは、やっと17・18世紀になってからである（図11・9）。6歳～14歳を児童期として特別に扱うやり方は経済的余裕や余暇が生じ子どもを生活のために働かさなくてもよいことが多かった上流社会とブルジョワからはじまり、世界に広まった。20世紀になってからの青年期の発見¹⁾も社会的経済的変化と無縁ではない。どちらかと言えば青年期は社会的概念であり、思春期（puberty）は急激な身体的変化が始まってから身体的成熟が安定するまでを表す生物学的概念である。

青年期の初期が情緒的動揺も大きく第二反抗期とも呼ばれる背景には思春期の存在と同時に近代国家の要因がある。近代国家への発展過程においては高度

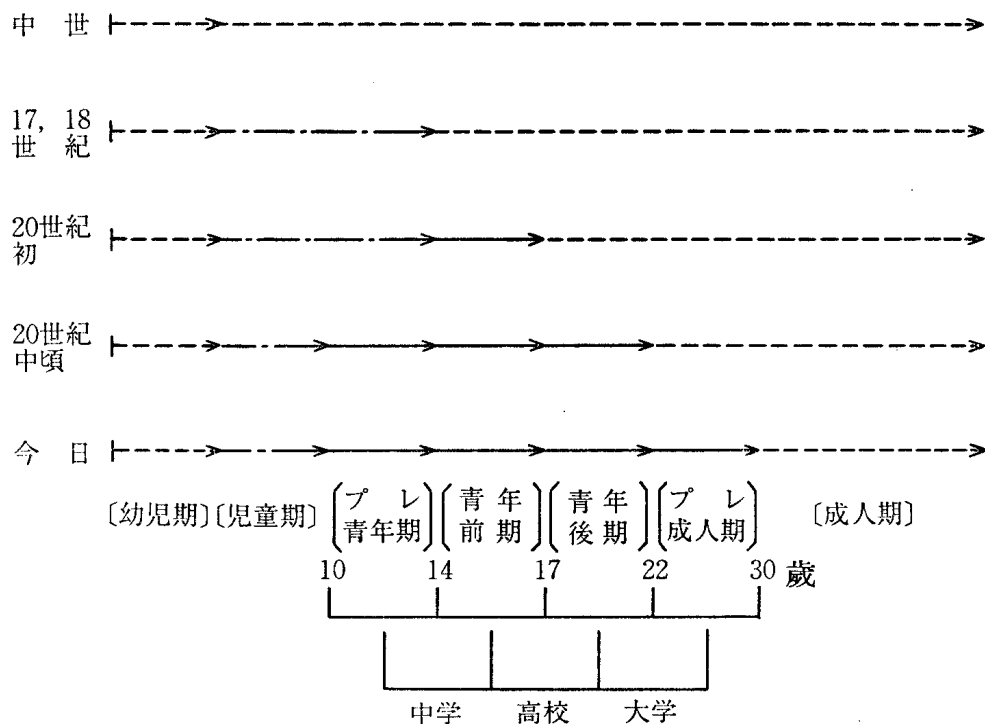


図 11・9 青年期の延長とその区分(笠原, 1984)²⁾

- 1) 青年期が1つの時期として位置をしめるようになったのは、アメリカの心理学者 Hall, G. Stanley が欧米の青年心理に関する研究資料を“Adolescence”2巻として集大成した1904年からである。
- 2) 笠原 嘉, 前掲書

な技術や知識の習得を必要とするため、身体的成熟より社会経済的独立が遅れて、両方のピークが離れる傾向にあり、その差の大きさがその中間点にいる青年に葛藤を起こさせる一因にもなりやすい（図11・10）。現代は技術・知識習得と実社会での経済的獲得が併走する社会現象も生じており、青年期現象は複雑になってきている。

未開社会の青年の研究をしたミード, M.¹⁾によると、社会文化的条件によっては反抗期や自我のめざめといった現象もなく青年期は存在しないという。過去のソビエト²⁾でも成熟に伴う青年期の情緒的“疾風怒濤³⁾ (storm and stress)”は資本主義体制下の階級現象と見られていたが、社会体制が変わってくるとどうなるか。一方、各反抗期の存在は生物学的事実であると主張する立場 (Buseman, A. 1928) も以前からあったが、青年期に平静でいるような青年はそれ自体精神治療が必要であるとまで言い切ったのは Freud, A. である⁴⁾。青年期には成人期と本質的に異ったものがあるとするなら、期年期延長はいつまで可能だろうか。神経症のために精神的に苦しんできた人も30歳前後になると、それなりの安定を得ることが多いことなどから（図11・11）、青年期の最後尾

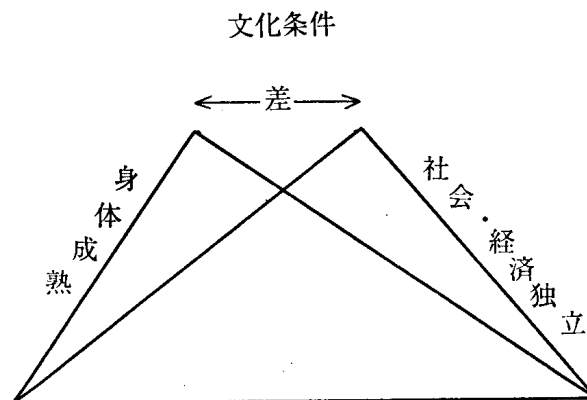
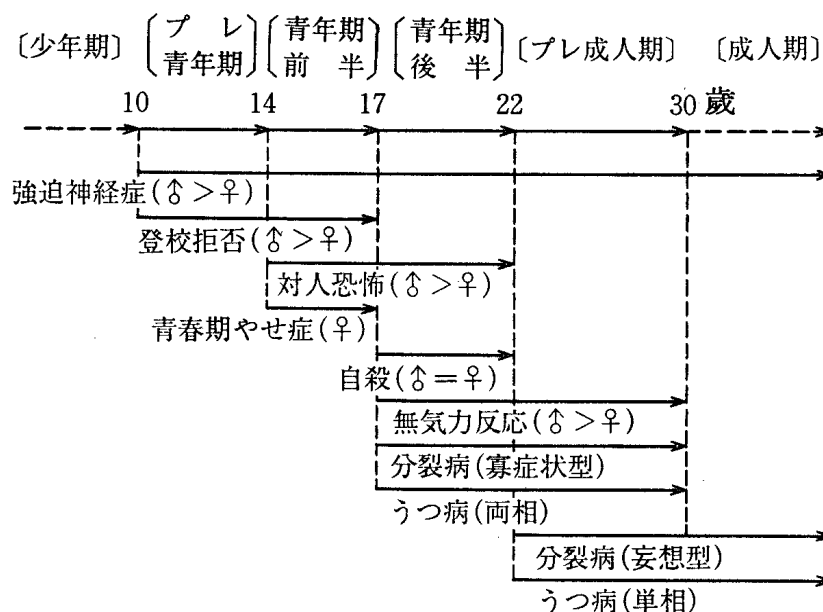


図 11・10 青年期の葛藤の一要因

- 1) Mead, M. 1939, "Coming of age in Samoa." *From the south seas*. William Morrow, pp. 196~233.
- 2) Kassof, A. 1965, *The Soviet youth program*. Harvard Univ. Press. pp. 23~27.
- 3) もともとドイツ・ロマン派のことばである。
- 4) Freud, A. (1969), Adolescence as a development disturbance. In G. Kaplan & L. Lebovici (Eds.), *Adolescence: Perspectives*. New York: Basic Books.

図 11・11 各期の好発病像 (笠原, 1976)¹⁾

は30歳にも至ると考える人もいる。

第12節 成人期以後の発達

身体的成熟の一応の完了をもたらす青年期をもって発達の頂点と考える時代は過ぎ去ろうとしている。発達は誕生から死に至るまで展開するという生涯発達の視点からの研究が出始めている²⁾。そのような目で見ると、今までマイナスのイメージを与えていたものが、実はプラスのものを産み出す機会の到来を予期させるものであったりする。「中年の危機」を機会にいままでにない創造的な生き方をひらく人もいる。このような点からそこに「創造の病」³⁾ creative illness の存在を指摘した人もいる。図12・1は自殺者の統計であるが、1975年頃は第二の誕生といわれる青年期に一番多かった。1987年は産業機器の職場導

1) 笠原 嘉 (1976), 今日の青年期精神病理像, 笠原嘉・清水将之・伊藤克彦 (編) 青年の精神病理, 弘文堂

2) Baltes, P. B., Reese, H. W., & Lipsitt, L. P. (1980), Life-span developmental Psychology, *Annual Review of Psychology*, 31, pp.65-110, ほか。

3) Ellenberger, H., (1970), *The Discovery of the Unconscious: The History and Evolution of Dynamic Psychiatry*. London: Allen Lane, the Penguin Press.

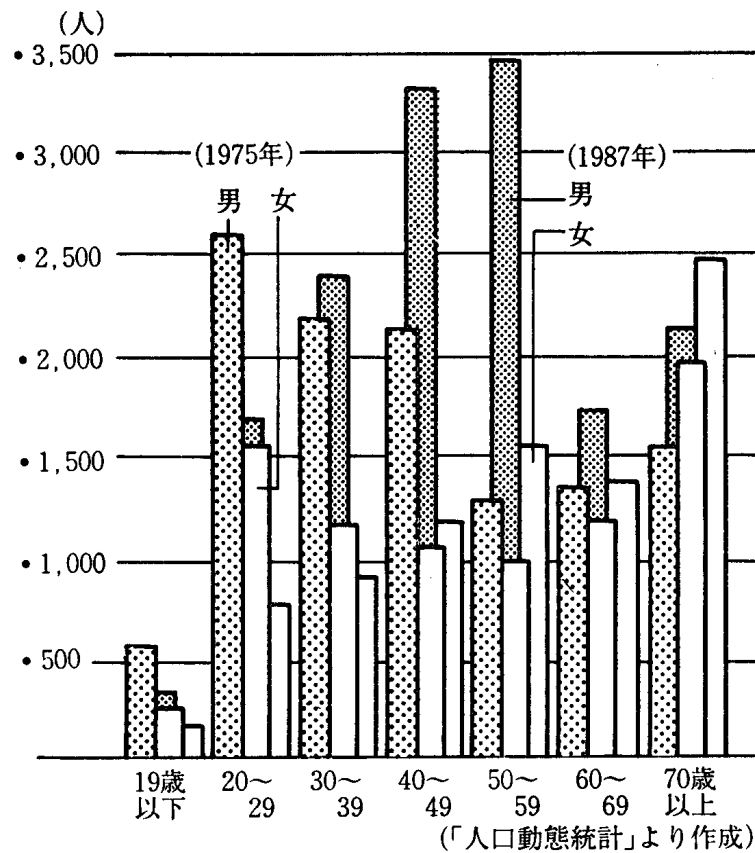


図 12・1 男女別・年齢層別の自殺者数¹⁾

入、年功序列への疑問、女性の職場進出、価値観の混乱など時代の曲り角にさらされた中年男子40~50代が非常に多い。比較的いつも多いのは老人である。死を前にした老年期も人生に対して今までにない新しい見方を迫られる時であろう。危機になりやすい時期は新しい誕生と隣合わせでもある。

一般家庭では子どもの青年期の危機は親の中年の危機と重なりやすい。これは青年の“第二の誕生”と親の“第三の誕生”が重なり、親と子の相互作用により家族ライフサイクルの上で非常に力動的な時期になることが予想される。

ここでは父と母と子どもの三者が関り合う現実的な問題の1つとして、親子関係について少し触れる。子どもの発達に大きな影響を与えるものに親子関係がある。親の態度の分け方としては民主型—専制型などがあるが、古典的にはサイモンズ、P.M. (1937) の親子関係の研究がある。彼は親の態度を支配—服従、受容—拒否という2つの軸を直交させ、それらの組み合わせで溺愛・

1) 日本放送協会編 (1990), NHK セミナー4月号, 日本放送出版協会, p. 21.

図 12・2 両親態度診断検査（親子関係診断検査の幼児用）²⁾

- 1) 品川不二郎, 他: 明治図書, 1958.
- 2) 和泉忠俊, ほか (1973), 教育相談, 大成出版社, p. 194 の図

かると、必ずもう一方の片親はとめますか。④母（父）親の居ない時、その人のことを子供と批判したり、批難したりしますか、⑤子どものことに関しては、片親だけが責任をとり他方は任せきりですか、など、このような項目で測定された両親間の不一致程度が高い場合は、他の型も比較的高く出やすい、例えば、図12・2では父親の不安型と溺愛型と盲従型が高くなっている。このように数種の型が輻湊しているのが普通である。

第13節 思考の発達について

今まで性格形成とりわけ対人関係を軸にして述べてきたが、ここでは知的発達について述べる。思考はその目的的特徴を強調する場合は問題解決(problem solving)に重点を置いて定義されるが、思考は広義には無意識的な動きをも含み一義的には定義されにくい心の広い働きを示す。まずは初期の思考に関する自己中心性からみていこう。

1. 自己中心性 (egocentrism)

乳幼児期にみられる一般的な心理特性や思考様式としてピアジェ¹⁾が用いた用語である。自己中心性とは客観的現実と主観的現実の区別ができなく、物事を自己の視点からのみ捉えることをいう。子どもの自己中心性に基づくものとして Piaget は次の3つの世界観をあげている。

(1) アニミズム (animism : 汎心論, 物活論)

自然現象にも自分と同じように、生命・感情・意識など心があり、活着していると考える思考様式を一般にアニミズムという。例えば、自分の顔にふりかかってくる風に揺られているカーテンに向って「どうして、私をいつまでもいじめようとするの?」とか、沈む太陽を見て「お日さまもおねんねしようとして

1) Piaget, Jean (1896~1980) Switzerland の Neuchatel に生まれた発達心理学者。初め生物学を学んだ。自然科学と哲学を結ぶものとして心理学に関心を持つ。「幼児の言語と思考」1923,「発生的認識論」1970など知的発達について20世紀最大の業績を作った。

いる」等の考え方である。この発達段階は初めは、①すべてのものに、次に②動くものだけに、次に③自ら動くものだけに、更に④動物だけに、魂を認める4段階に分けられる。

アニミズムの概念はもとは文化人類学者 Tylor, E. B. (1871) が提唱したもので、自然や諸現象には *anima* (靈魂) の働きが存在するという原始民族の信仰のことを意味し、彼はアニミズムを宗教の起源と考えた。

(2) 実念論 (realism)

アニミズムは客観的(物質的・具象的)なものが主観的なものに置き換えられる方向にあるが、実念論は主観的(精神的・抽象的)なものを客観的に実在化する方向でとらえるのである。例えば、リンゴという名称もリンゴの中に在ると考え、記号としての名と物の区別ができてない。「夢はどこにあるか？」の間に、夢は枕の中にある、頭の中にある、夜に外からやってくる等と答えたり、自分の頭の中で考えただけのことが本当にあることだと思ったりする。子どもの実念論も意識と物質を全く区別し得ない絶対実在論から、意識は物質ではなく主観を伴うものであることを認める相対的実念論まで数段階の発達を区別できる。

(3) 人工論 (artificialism)

すべてのものが人間によって作られた人工的なもので、人間のためにあるという見方である。例えば、お日さまはどうして出来たかと聞くと、巨人がいて火の球をこねて空へほうり上げた¹⁾。夜はどうしてあるかと聞くと、子供が寝るためにあるなど。

(その他) 相貌的知覚 (physiognomic perception)

これは Werner, H. (1954) が幼児や未開人における未分化な精神構造からくる原初的な知覚様式を示すものとしてあげたものである。人相や容貌からその人の運命や人格を判断するのが *physiognomy* (人相学) であるが、自然や物理現象に人相や喜怒哀楽などの相貌を知覚することを相貌的知覚という。例えば、柳の木は疲れている、雲が逃げていく、森が怖い顔をしているなどであ

1) 山下俊郎「幼児心理学」朝倉書店、昭和49年の例。

る。物が *anima* や生命を持っていると考えるピアジェの *animism* も同様な趣旨である。

2. 自己中心的言語

自己中心性は幼児の思考だけではなく、使用する言語にも当てはまるとピアジェは(1924)考えた。彼は幼児の会話を分析して、批判・命令・質問・応答などのように相手との間に社会的伝達機能を果たしている社会的言語と自己中心的言語に分け、幼児には後者の占める割合が多いことを指摘した。

ピアジェは自己中心的言語の典型として集団的独語(*collective monologue*)をあげた。集団的独語は集団の中にいることがきっかけになって外見上は相手に向かって話しかけているようにも聞こえるが、相手が聞いていなくても、応答しなくても平気であり、結局は独語に終って伝達機能を果たしていない言葉である。4～5歳頃に多いといわれる。集団的独語は幼児期を通して多く見られる平行遊び(*parallel activity*)と類似しており、幼児心性を考える上で貴重なものと思われる。ほかに反響言語(*echolalia*)のような言語、独り言などがある。反響言語とは他人の質問・文章・音声などを顰返しの真似てしまうような言葉である。反響言語(Kanner, L. 1943)は常同行動(*stereotyped behavior*)などと共に自閉症(*autism*)の特徴としてあげられる。

ヴィゴツキー¹⁾によると言葉は最初伝達のための外言(*outer speech*)から発生する。外言は音声を伴う伝達機能としてのコミュニケーションで、いわば対人的社会的手段としての言葉である。5～6歳頃には内言(*inner-speech*)が誕生し、思考活動が豊かになるという。内言は音声を伴わない言語で、思考や心的活動の手段ともなる。彼は幼児が熟考を要求された場面で自己中心的なことばが増加することを観察し、自己中心的言語を、社会的言語の「外言」から思考手段としての「内言」への移行型態すなわち過渡的現象として捉えた。

1) ソビエトの心理学者 L. S. Vygotsky (1896～1934) は精神発達とくに言語の研究をした。「分裂病者の思考」1934, 「思考と言語」1939 (柴田義松訳, 1962, 思考と言語, 明治図書) などを著わした。

そして自己中心的言語から論理的思考と行動調整のための内言への移行は7～8歳頃とされた。

38歳の若さで没した Vygotsky の見解を発展させた Galperin, P.Y. が言語の発達を基準にして認知の発達段階を4区分した。更には米国の心理学者 Bruner, J. S. が世界を表象 (re-present) する仕方を基準にして発達段階を3区分した。これらは細かい点を抜きにすれば次に述べる Piaget, J. の発達段階の区分に対応している (図13・1)。

3. 思考の発達段階

物事の1つの側面のみに注目して他の側面を無視して考えることを、1つの側面に中心化 (centering, centration) した思考であるという。自分からの視点 (側面) に大きく左右されている、自己中心性とは自己に中心化している心性のことである。自己の立場に捕われず、他人やその他いろいろな立場からも考えれる、即ち脱中心化 (decentering) して物事を操作 (operation) できて、初めて思考の本質が展開される、というのがピアジェの見方である。それ故、脱中心化が出来てからの思考を操作期とし、その前の思考を前操作期として区別した。それではもう少し詳しく見ていこう。

(1) 感覚運動期 (motor-skill period) 0～1.5, 2歳

前操作期の前に感覚運動期を置く。両時期とも自己中心性時代に属するが、感覚運動期はものを実際に「見たり」「掴んだり」「くわえたり」等の感覚や運動 (動作) を通して世界を理解していく時期をいう。自己の感覚や動作が及ぶ範囲内での思考である。

ここでピアジェは、個人と対象を結びつけるもの、言い換えると個人が対象を理解し、取り入れていく心理的構造をシェマ (schema : 図式, 情報処理体系, プログラムなどの意) と呼んでいる。この時期は「掴むシェマ」「くわえるシェマ」などいろいろな「感覚運動的シェマ」を使って、これは丸いとか味が無い等ということを理解していく。

このように対象を理解し、自分の心の中に取り入れていく働きを同化 (as-

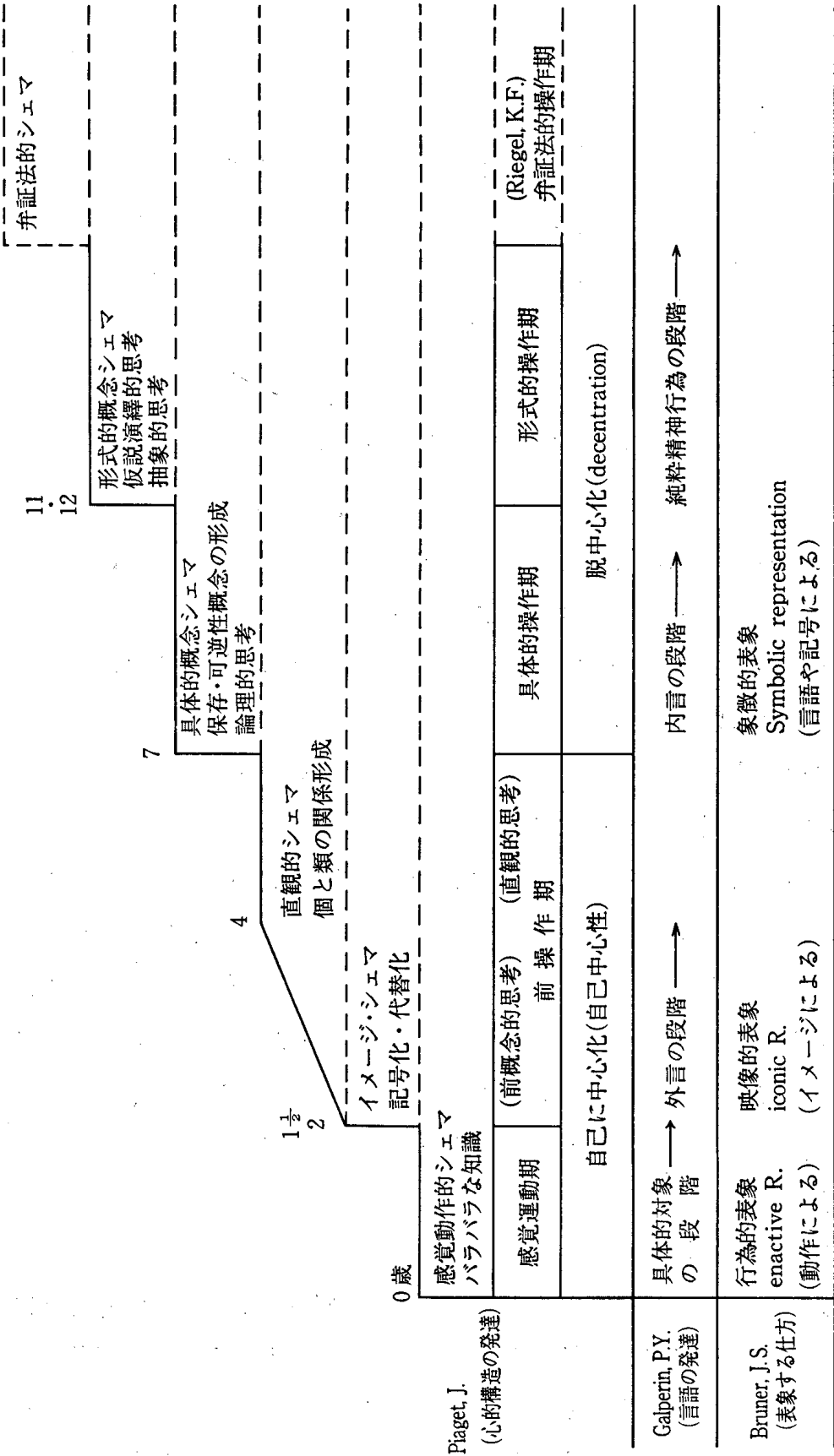


図 13・1 思考の発達段階

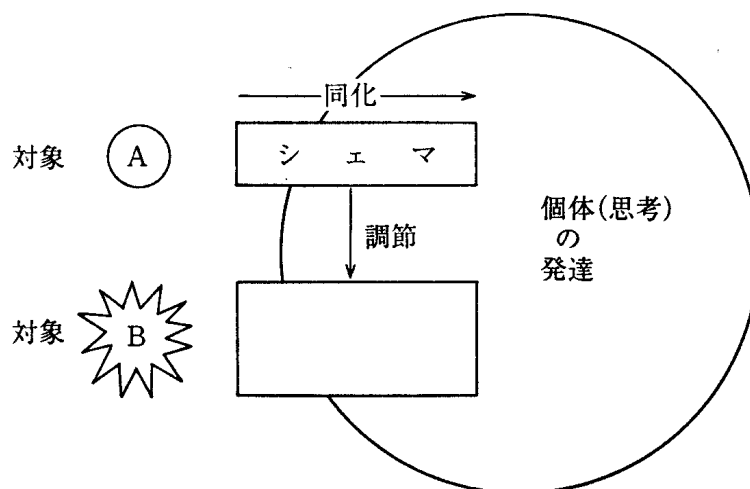


図 13・2 シェマの同化と調節

simulation) と呼んだ。しかし、掴んだり、くわえているだけのシェマでは、その物の内部の様子は理解できない。こんどは握りつぶすなり、歯でかじってみるなりして、今までのシェマが修正されて、初めて、中に黄身があるとか、おいしいとかがわかるようになる。このシェマの修正を調節 (accommodation) と呼んだ (図13・2)。

ある対象を今まで使っていたシェマでは同化できない時は、シェマの調節が起って初めてその対象を理解することができる。シェマが同化できる範囲が広がったといえる。使われるシェマがいつも固定されていて、シェマの調節の起こらないところには発達はいない。ピアジェは子どもの知的発達を同化と調節の働きによるシェマの変容過程としてとらえる。知的発達は個人が対象を取り入れていく媒介として、いろいろな感覚運動的シェマの活用からイメージ的シェマ→直観的シェマ→概念的シェマの獲得へと進んでいく過程である。

(2) 前操作期 (preoperational period) 2～6・7 歳

前操作期は次の2つに細分できる。

① 前概念的思考の段階

感覚運動期には現物が視野から消えると、その物は心の中からも同時に消えたのであるが、やがて現物が視野など各感覚野から消えてもその刺激を思い浮かべたり、心の中でその物をイメージできるようになる。例えば母親が目前にいらなくても、心の中で母親の姿を思い出すことができる。内面化された母親の

イメージをいつまでも保持し、いつでも再生できるようになる。現前しない対象とでもイメージを通して付き合えることができることになる。何ものかを別の何ものかで表わすことを一般に象徴 (symbol) という。現実の母を心の中のイメージで表わしたり (represent 表象), 更にその母のイメージをこんどは特定の人形や「お母さん」という特定の言葉で表わすことも可能になる。イメージ・シェマあるいは象徴的シェマが獲得されたといえることができる。

しかしこの時期のこたばの多くは、まだ個別的な性格を備えており、こたばの共通的性格を備えていないのが大きな特徴であり、前概念的思考の時期 (2～4歳) と言われる。例えば「お母さん」は自分を中心にして自分の母親を呼ぶ時だけにしか通用しない。よその人が自分の母親を「おばさん」と呼んだら「この人はおばさんでなく、お母さんだ」と怒り出す、といった具合である。

しかし、象徴的シェマの発生は、人形をお医者さんに見たてたり、実際に食べる代りに食べる 振りをして 遊んだりする「象徴遊び」あるいはいろいろな「ごっこ遊び」を可能にする。そしてごっこ遊びの中で、例えばお母さんごっこ遊びの中では、自分の代りに特定の子供人形を中心にして、A人形を「お母さん」、B人形を「お医者さん」と呼んだりする。これは自己中心性からの離脱の準備や、母親や他人の立場への理解を示しはじめる機会をつくる。子どもは遊びを通して思考を発達させていくことが多いのである。

② 直観的思考の段階

イメージ(心像)は何ものかを別の何ものかで表す再生的機能を主にしていたが、この段階では再生されたバラバラな個々の知識間を直観的にではあるが、関係づけられるようになる。自分の母も友人の「母」も人形の「母」も、同じ仲間・類であるという理解が生じる。母親と祖母との関係もある程度理解できるようになる。個と類、部分と全体の関係が理解でき、物がある基準で並べたりする系列化もできる。しかし、それは直観に依っているものであり、明確な意識



図 13・3 直観的思考の段階

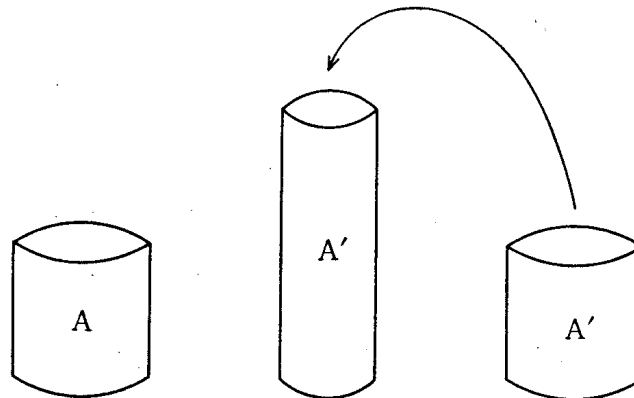


図 13・4 液量の保存の実験の一例

性をもってやったわけではないので、誰にでも通用するような論理的な説明を自分ではできない。次の有名な保存実験はそのことをよく示しているが、自分から新しい世界に入るためには直観を必要とすることがある。

〔保存実験〕 同形の容器で $A = A'$ を確認させた後に、 A' の水を長いグラスに注ぎ換えて、 A と A' の量を問うと、 A' の方が多いと答える（図13・4）。高さの次元のみに注目して、直観で A' が多いと判断するのである。物事の1つの視点でしかない高さの次元のみに中心化しているからである。

(3) 具体的操作期 (concrete operation) 7 歳頃～

上の保存実験で高さだけでなく幅の視点をも加えられるようになると、注ぎ換えても A' は A と同量であると判断できる。1つの次元だけに束縛されない脱中心化 (decentering) がなされたからである。ピアジェは思考の本質は脱中心化から始まると考え、この段階に初めて「操作 operation」という語を当てたのである。

ピアジェがいう操作とは、物事のあらゆる次元（例えば、高さ・幅・奥行）を関連づけて1つの体系化された構造化をイメージできる心的活動である。その体系化された構造は各側面にバラバラにされても、その全体量は不変であることを認識できる。この体系の中では常にある操作に対してそれを元に戻す逆の操作も備わっている。そこでは保存 (conservation) の概念が形成され、可逆性 (reversibility) が理解されているからである。操作が形成されたことの基準は、保存概念の獲得である。この段階で初めて自己の要求や感情とは関係

なく、時には自己と矛盾する結論や判断を出せるようになる。

しかし、この時期は具体的に知覚したり実際に経験したことによってなら論理的思考も施せるが、抽象的なことや未知の領域に対しては困難である。それは次のような問に対しても表われる。

〔問〕 $A > B$, $A > C$ を仮定すると、 B と C の大小はどうなるかと問うと、 $B > C$ であるか、少なくとも B は C より小さくはない、という答えが返ってきやすい。これはこの子が現実の学習場面で経験した $A \rightarrow B \rightarrow C$ という何らかの具体的な順序にとらわれているからである。

(4) 形式的操作 (formal operation)¹⁾ 11・12～

上の問で自分が具体的に経験した学習内容から離れて、 B と C の大きさは決まらない、という結論を出せるのが形式的操作である。論理の形式だけに導かれた論理的思考を基にして、 B と C は単なる記号なので交換して C と B としても何ら差し支えないことを理解しているからである。

形式的操作は現実の内容がどういうものかというよりも、推論の形式が正しいかどうかだけに興味を持つ思考である。たとえ現前の事実と矛盾していても、論理的に導き出された結論の方が真理だとすることもできる。2つの前提(仮定)から1つの結論をだす、論理的思考の典型である三段論法(syllogism)推理も可能になる。それ故、具体的事実から離れた未知の問題を考察するために、必要な仮説を考え出して検証するという科学的思考も芽ばえる。そして、論理に導き出された、現前しない新しい視点から、逆に現実を見直していく仮説演繹的推理(hypothetico-deductive reasoning)も可能になる。

日常生活においては、現実の事実や自分の行動が伴わなくても、言語だけによる抽象的思考を展開し、現実や他人を批判することもできる。この時期を言うことはよくて為ることは反抗的な矛盾道德の時代とか口先道德の時代と呼んだ人もいる²⁾。第二反抗期の表われ方は種々あるが、成人には理屈っぽく映る

1) 形式的操作の形成年齢は分野の違い・材料に慣れ親しんでいた程度・教育の長さ等により必ずしも一致しない。このことは具体的操作の形成年齢についても同様である。

2) 鈴木 清, 学童期における道德意識の発達, 小・中学校における道德実践指導講座 I, 昭30, 光風出版

背景には上述のような理由もある。が一方、具体的操作段階では理解が困難であった比喩，風刺，隠された意味など裏の世界を仮定して，それについて考えられるようになるのもこの時期である。

(5) 弁証法的操作 (dialectic operation)

Piaget の思考の最高段階である形式操作に，リーゲル¹⁾ は第5の段階として「弁証法的操作」または「形式操作後の思考」を加えることを提唱している。それを考える若干の資料をみてみよう。

ある人の表情や身振りとその人の言葉が矛盾していることに気付くと，青年は言葉を取り他の方を無視したりするのに対し，成人期の被験者は両方の情報を考慮する傾向があった。また，矛盾するような情報に直面する法廷での陪審のような事態において，青年と比べ成人は1つの情報のみに依存しないでそれらの情報を統合しようとする傾向があった²⁾。

また①双方の言い方が対立するような戦争の弁明，②祖父母を訪問することについての青年と親との葛藤……といった社会的ディレンマの物語りを読み，被験者の立場を説明するように求められた。結果は青年の方はどちらか一方の立場をよしとし，白黒の決着をつけようとする傾向があった。他方，30～40代の成人は双方を和解させようとし，更に事実は事実として当事者の解釈から切り離して，自分なりに焦点をしぼって考える傾向があった³⁾。互いに相いれない見解に直面すると，成人は複数の見解をより大きい枠組みの中に統合しようとするのである。

成人期以後は実際に世間の矛盾した事象にかかわり，矛盾を受け入れざるを得ないことも多い。人は同時に長所と短所を併せもっているし，時には優しくても他の時には冷酷であることに接しており絶対的真理に達することはできな

1) Riegel, K. F., "Toward a dialectic theory of development" *Human development*, 18, pp.50~65, 1975.

2) Hoffman, L., et al. (1988), *Developmental psychology*. (5th ed.) New York; Random House (山内光哉編，発達心理学 下，ナカニシヤ出版，1990年よりの要約)

3) Blanchard-Field, F. (1986), Reasoning on social dilemmas varying in emotional saliency. *Psychology and aging*, 1, pp.325-333.

いことを知っている。つまり成人の思考はたえず弁証法を内蔵した事態に置かれているのではないか¹⁾。成人以後の思考については20世紀前半まではほとんど関心が持たれてなかったが、次第に成人の推理らしい心的構造の検証に注意が注がれるようになってきている。

1) 山内光哉編(1990), 発達心理学 下, ナカニシヤ出版